

---

# ある冒険者の物語

丸歩堂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある冒険者の物語

### 【Nコード】

N5730S

### 【作者名】

丸歩堂

### 【あらすじ】

ここは4つの大陸からなる世界「エデン」  
その大陸のひとつであるクーレリア大陸にあるデルピユネー王国の  
辺境に住んでいるスコール＝ランスロットの物語  
農家の平凡であった彼は父のしをきっかけに村を追い出されてしまっ  
た。  
生きていくために生前父から言われたギルドに行き冒険者になる。  
そこで高ランク冒険者になるため奮闘していく…

注！ 主人公は特別な力を一切持っていません

また、依頼に失敗してしまうことが多々あります。

話の展開がゆっくり進んでいきます。

従って、主人公最強しか認めねーという人や、主人公の失敗なんて見たくないと思う人はご遠慮ください。

どうか宜しくお願いします。

## 00 プロローグ（前書き）

初投稿作品です。

立ち上げ予定の同人サークルの作品の練習もかねて投稿しました。

まだまだ力不足でしょうが、宜しく願います。

ブログもやっておりますので気に入っていただけたら一度覗いてくれたら

丸歩堂は歓喜で小躍りします。

追記：話数を01から00に変更しました。

## 00 プロローグ

ここは4つの大陸からなる世界「エデン」

その大陸のひとつであるクーレリア大陸にあるデルピユネー王国の  
辺境地である、

ここエキドナ村の平凡な農家の息子スコール・ランスロットの父で  
あるドリス・ランスロットが亡くなる  
数十分前からこの物語は始まってゆく。

### エキドナ村

みすばらしい家の中には二人の人影があつた。

一人は痩せ細つた体でベッドの上に横たわっており誰が見ても、  
その命があとわずかであることがわかるほどに衰弱していた。

そしてその傍に寄り添うように一人の少年がいた少年の容姿は、  
中世的な顔立ちをしておりともすれば少女と見間違えてしまいそ  
うな容姿である。

髪はこの世界ではよく見られる黒色で肩の辺りまで伸ばしていた。  
瞳の色は炎のような赤い色をしていた。

そしてその少年がベッドに居る人物に必死に声をかけていた。

「父さん！しつかりしてくれ！！もうすぐ医者がくるんだ！

きつと父さんの病気もなおしてくれるはずだよ！」

「いや……無駄だろう自分の体のことは自分が一番良く知っている  
からな……」

「そんな事言わないでくれ！父さんが居なくなったら僕はいつたい  
どうしたら良いんだよ！」

まだ教わってないことが沢山あるし、僕一人だけじゃあ生きて行  
けないよ……！

「父さんお願いだから…もつと…もつと生きていてくれよ！」

そう言って少年　スコール「ランスロットは父であるドリス」  
ランスロットに泣きついた。

しかしドリスは弱々しく首を横に振り、

「スコール確かにお前一人でこの村で生きていくことは出来ないだろう。」

なぜなら村長がお前をこの村から追放するだろうから。

だがそれは、仕方が無いことだ。私たちは所詮流民なのだ。

むしろ今まで置いてくれたことが奇跡なのだ。

だからスコール、お前はこれから一人で生きていくために稼がねばならない。

そのためにはギルドに行くんだ。そして冒険者として生きていくんだ…」

そう一息に言い切り激しく咳き込んだ。

「父さん！もう喋らないでくれ！すぐに医者に来てくれるから」

「ゴホツゴホツ！…いやもう駄目だ、私は直に死ぬだろう。」

その前に…お前にゴホツ！…伝えたいことがある。」

先ほどからドリスの咳が一向におさまらない、どころか酷くなっている。

「わかったから…お願いだから喋らないでくれ父さん…父さん！その時部屋にノックの音が聞こえた。」

「やっときた！先生こつちです！！早く来てください！」

家の扉を開けた先にはスコールの待ち人である

少し肥満体系で白髪が生えた医者　シエルパーが到着した。

シエルパーはかなり急いできたのだろう、汗だくで何度も咳き込んでいた。

が、息を整えると直ちにドリスの容態を診察し始めた。

スコールはシエルパーなら何とかしてくれるはずだと思っていた。

しかし、

「……スコール、落ち着いて聞くんた。残念だがドリスはもう助か

らん」

告げられたのはスコールにとって残酷な宣言だった。

「そ…そんな！嘘だ、先生お願いです！」

いくらでも払いますからどうか父をたすけてください！」

「お金の問題じゃないんだスコール落ち着くんのだ」

だが父がもう助からないと聞いてスコールはかなり取り乱していた。シエルパーの声が聞こえないほどに

「嘘だ！！父さんが死ぬなんてあり得ない！父さんは…父さんは僕を残して死んだりしない！！」

シエルパー先生！嘘なんでしょう、嘘といってください…先生！！」

「いい加減にせんかスコール！！」

ぱんっ！

部屋中に乾いた音が響き渡った。

「っ！！…シエルパー先生？」

たたかれたシヨックで正気を取り戻したスコールはシエルパーの顔を呆然と見つめた。

「叩いたことは謝ろう、すまなかった。

しかしよく聞けスコール…君には親父さんの言葉を聞く義務がある。

今際の際にたっている親父さんの最後の言葉を聴くことが出来るのはスコール、君だけだ」

シエパードは優しくスコールにそう諭した。

「……………わかりました。ご迷惑をかけてすいません。それと、ありがとうございますシエルパー先生。」

「うむ、さあ親父さんが待っている。時間はもう少ないぞ…後悔だけはするなよ」

シエルパーはそれだけ言ってドリスが寝ている部屋へのドアを開けてスコールを部屋に入れた。

「…父さん」

「おおスコール、まだ伝えてない私の最後の話がある。どうか聞いてくれ。」

ドリスはそういってまた咳き込みながらそう言った。

「聞かせてくれ、父さん」

「ああ、冒険者になれといったところからだったかな？」

「あつてるよ、だけど僕には冒険者になっても何も出来ないよ

そりゃ、うちは農家で農作業などをしてきたから少しは力があるけれど、

それでもまだ他の冒険者からすると非力だし、

なにより剣術なんて習ったことなんてないんだよ？

そもそも武器を買うお金も無い。おまけに魔力が優れているわけでもないんだ。

せいぜい雑用ばかりするだけで終わってしまうよ」

そう、この世界には魔法が存在する。

しかし魔法を使うことが出来るのは裕福層の国民ぐらいである。その理由は彼らが特別だから、ではない。

誰でも魔力というものは宿っていて原理さえわかれば使用できるのだが、

その為には、教会に莫大な寄付金を払い教会から神の力が宿った洗礼を受ける必要がある。

仮に寄付金が払えず洗礼されぬままで魔法を使用した場合、

使用したときに自分の魔力が暴走してしまい爆発してしまうのである。

もちろん、流民の末の農民であるランスロット家にそのような資金などなくスコールが言った通り

彼には特別な力など、なにひとつ存在しないのである。

そのため彼が冒険者になっても低ランクで生涯を終えると答える人のほうが圧倒的に多いだろう。

しかし、ドリスは違った

「いや、確かにお前には目に見える特別なものは無い、しかしおま



えには

人一倍忍耐力が強く諦めるということをあまりしない。

一度諦めても何度も努力して自分の知識を総動員して策を練って立ちふさがる壁を壊してきただろう。

その不屈の精神があれば冒険者でもかなりの高ランクに行くことが出来るだろう。

スコール…私はお前をいつまでも見守っているから、がんばるんだぞ。ゴホツゴホツ!!」

「!!父さん…血が！」

「もう時間のようだ。すまないスコール」

「シエルパー先生！父が」

「スコール生まれられてありがとう。」

そしてドリスは目を閉じて動かなくなった。

「父さん…？嘘だろ？目を覚ましてくれ父さん~~~~~!!」

この日ドリスⅡランスロットは死んだ。

そして冒険者スコールⅡランスロットの冒険が始まる。

## 00 プロローグ（後書き）

ご意見ご感想ありましたらどしどし送ってください。  
最後までお読みくださってありがとうございます。

01 〽別れと旅立ちと〽 (前書き)

2 話目投稿です

じゆんじゆんじゆんじゆん

## 01 別れと旅立ちと

### エキドナ村・ドリスの家

そこではドリスの葬式が行われていた。

ドリスの葬式には両手で数えられるほどの人間しか参列していなかった。

スコールが参列した人の中で名前を知っているのは流民だという理由で差別せずに最後までドリスのことを必死に助けようとしてくれた、シエルパー先生と

この村に流れてきたときから流民であるスコールに積極的に話しかけてきてくれた、

とある少女の二人だけだった。

あとはドリスが面倒をみていた数人だけである。

もっともその者たちも本当に死者を悼んでいる様子など無く、義理立てのために参列している様子で今はもうすっかり葬式自体に興味を失った様子で参列していた少女の興味を引こうと必死に話しかけている。

もっとも話しかけられている少女はまったく彼らの話を聞いておらず真剣にドリスの死を悼んでいる様子だった。

スコールは彼らを見て落胆した。

(…結局父さんの死を本当に悲しいと思っている人はシエルパー先生とシャルぐらいしか居ないのか。

何で誰も来ないんだ…父さんは立派に村のために働いたじゃないか！)

スコールがそう村の住民たちに憤りを感じていると

「スコール」

と後ろからスコールを呼ぶ声が聞こえた。

後ろを振り返ると、そこにいたのは少女だった。

それは先ほど彼らたちに話しかけられていた人物と同じだった。

彼女の名前はサリア・アルコット・シャルロス。名前から分かるとおりの貴族だ。

通常、貴族やそれに近いものたちの性格は弱者をいたぶり贅の限りをつくす。

そのくせ顔立ちは整っているものが多いといったものだが、彼女はそんな普通の貴族と違って、誰とでも分け隔てなく話すので瞬く間にこのエキドナ村のアイドル的存在になった。

彼女の容姿は綺麗というよりかは格好良いと思わせる顔立ちで男勝りな口調もあって、

村の男性だけでなく女性の多くのものも彼女の虜になっている。

そして彼女と親しいものはサリアと呼んでいる。

……スコールは知らないことだが彼女が自分のことをサリアと呼ぶのを

認めている男はスコールただ一人だけだった。

このことは村人がランスロット家を避ける原因のひとつだった。

そんな彼女が、腰までまっすぐに伸びている金色の髪をたらし

海を思わせるような深い青色の瞳で心配そうな顔でスコールの赤い瞳をじっと見つめていた。

「サリア？どうしたの？」

「いや、ドリスさんが死んでしまっただ変だったな。

でも、ドリスさんはきつと、そんな世界に絶望したような顔で見送られるよりも

笑顔で見送られるのを望んでいると思うぞ？」

「…そんなこと無いさ、きつと父さんは僕の笑顔より沢山の人たちの笑顔のほうが

父さんは喜ぶよ。」

「それは無いよスコール。私はドリスさんからあなたの話を良く聞かされていたんだぜ。

本当に生まれてきてよかったって、何度も何度もそれこそ耳にた

こが出来るくらい

私に言ってくるんだ。だから…笑ってあげて？

あんな怒っているような顔よりも…な？

私も一緒に笑って見送るからさ」

そうしてサリアはたとえどのようなものでも安心するような暖かい微笑を浮かべた。

「…そうだね、ありがとうサリア」

そういつてスコールもすぐ傍で自分を見守ってくれているであろうドリスに涙を流しながら笑みを送った。

（父さん安心して天国に言ってね。それと僕も父さんの子供でよかったよ。ありがとう）

それからスコールはいつの間にか泣いていたサリアとしばらくの間静かに涙を流していた。

#### 数日後・エキドナ村・北出口

葬式が終わり数日が経ったある日、村長が家にやってきてスコールに言い渡した

村から出て行ってくれないか

この言葉を聞いてもスコールは村長を憎悪の目で見つめたりはしなかった。

それよりもむしろ

（やっと僕もこの村を出るときか。）

という決意の思いのほろが強かった。

そして旅立ちの日を迎えた。

旅立つ少年を見送りに着てくれているのは

いやそうな顔をしながらも立場が立場なので来ている村長と心配そうな顔で少年を見るシェルパー医師の二人だけだった。

サリアはいないのかと少し待ってみるが、やはり来ない

( やっぱり、サリアも僕を嫌っていたのか？ )

そんなあり得ない事も考えてしまう。

そうこうするうちに村長の祝いの言葉と安全祈願の言葉が始まった。  
「今日この日にエキドナの村人であるスコール」ランスロットの新たな旅が始まる。

神よ！願わくば彼の者に祝福と幸運のあらんことを！」

祝いの言葉が終わるや否やスコールを一瞥もすることなく

村長は家へと戻っていった。

それを見送ると次はシエルパー先生が袋をスコールに渡して声をかけた。

「スコール道中は気をつけるんだ。最近はこのあたりでもモンスターが活動していることもある。」

絶対に死ぬなよ、私は一度自分の手で助けた命を無駄に捨てるような真似は許さんからな。

それと、これは少ないが路銀だ少しくらいはもっておいたほうがいいだろう？」

袋に入っていた金の量は決して少なくはない量だった。

「そんな！こんなに貰うわけにはいきません！ただでさえ治療費さえ満足に払えていないのに……」

「馬鹿モン！誰があげると言っただか！貸すだけじゃ！」

…分かったか貸すだけじゃからな？返さずに死んだりしたら、あの世まで取り立てにいくからの」

「先生……分かりました、必ず……必ず返しにきます。」

だから先生も返しにくるまでは死んじゃ駄目ですよ？」

「っか、生意気言うな全く、私はもう帰るぞ」

そっぴい残してシエルパーは村に帰っていった。

スコールはもう一度だけシエルパーに頭を下げた

登録のため街への街道を進んでいった。

エキドナ村・近くの街道

村を出て数分歩いていたら目の前に人影が確認できた。

(何だろう?)

いぶかしみながら歩を進めるとやがて人影が誰だか視認できた。

「サリア!」

「よう、見送り出来なくてすまん。どうしても父が許可してくれなくてな

ちよつと無理やりだがさきにここに来ていたぜ」

「そうなんだ、僕はてつきりサリアに嫌われたかと…」

思ったよ、そう続けるより早く

「そ、そんなわけ無いだろう!」

全く何考えているんだ、私がスコールを嫌う?あり得ないね」  
すごい剣幕で否定してきた。

「そ、そうかな?」

「そうだよ君はは全くそういうところがあるのがいけないだからこ  
のm」

「ごめん!許してくれって」

「ム、分かったならいいだろう。」

それよりも本題だ、君は冒険者になるのだろう?」

「うん、父さんにも言われたしね」

「うむ、それならいい…実はな私も冒険者になろうと思うんだ」

「サリアも?」

「ああ、父がまだ認めてくれないが今日から剣技を鍛えていこうと  
思う」

だからもし、万が一にも冒険者になったら一緒に依頼を受けない  
か?」

「本当に!分かった約束だな」

「ああ、だからスコールも絶対に冒険者になって私が冒険者になる  
前に

やられたりするなよ?」



「分かった。じゃあまた会う日まで！」

「そっちな！」

こうして二人はそれぞれの道へと進んでいった。

スコールはギルド支部がある街へ、サリアはエキドナ村へこの二人の道が交わるのはまだ少し先のことである。

## 01 〽別れと旅立ちと〽（後書き）

### 視点についての説明

基本的には3人称視点でいきますが、ときどき一人称視点で話を進めていくこともあります。

ちなみに、次回はサリア視点を予定しています。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

01 another 〱決意〱（前書き）

遅れてしまいました！

申し訳ありません！！

とりあえずは前回も書いたとおりサリア視点です。  
ごゆっくりどうぞ。

## 01 another 〱 決意

### エキドナ村・ドリスの家

今この場所では私の親友であるスコールの父であるドリスさんの葬式が行われている最中だ。

なぜ私がここに来ているかというと、1つは生前ドリスさんにはいろいろなことを教えてもらったから、

そして二つ目はドリスさんが私の親友のスコールの父であるからだ。最も葬式に来ているのは私と流民の患者にも全力で治そうとするので村人からは変人と称されているシエルパー先生と

生前ドリスさんが生前面倒を見ていた村の男たち 名前は覚え

てないが 3人だ。

最初は、あいつらにもちゃんと義理の心はあるのだな、  
と置いていたが始まってまもなく、急に喋り始めてこちらを見てきた、と思ったら

その男たちが寄ってきて私に話しかけてきた。

「シャルロスちゃんも来てたの？」

偉いねえ、たかが流民の為にそうまでして、このおっさんには過ぎた行為だと思うぜ？

いくらシャルロスちゃんがみんなと分け隔てなく接しているからって、相手は選んだほうがいいぜ？」

「全くだ、もう十分あいつの葬式に参加したからさ、俺らと一緒に戻ろうぜ？」

一秒だってこんなところに居たくねえや」

「賛成！ そうと決まれば行こうぜシャル？」

後のことは、あのガキとジジイに任せてたら大丈夫だぜ。

むしろシャルの為なら嬉々として働くさ」

「違えねえ！！！」

「ハハハハハッ」

一瞬でもこいつらに感心した自分を心の中で嫌悪する。本当にこいつらはドリスさんに教えられたことへの感謝を一片も持っていないらしい。

正直耳障りだ。この雑音を発するもの達をどうしてしまおうか？ドリスさんを侮辱しただけでなく、スコールまで侮辱したこいつらを。

私の心の中でこいつらを陰惨に殺す方法を100通りほど思い浮かべたところで我に帰った。

まあいい、こいつ等のことなんて考えている暇があったら、今はドリスさんの死を悲しもう。

彼らはめいめいにこの私とどこに行くかを話し合っていたが、

1人が私が話を聞いていないことに気づいて再度雑音を放ってきた。

「聞いているのかい？シャル？」

まだあの野郎の死を悲しんでいるのかい？

何をそんなに真剣になってるんだ、あの流民ごときに」

続いてもう1人が

「そうだけえ、なんだって今までこの村に住まわさせてやったのに結局やった事は

俺らに剣の振りかたに対する小言だけだ。

一回だけ俺らに勝てただけなのに師匠ぶるんだぜ？

シャルロースちゃんもかなり言われてただろう？

本ツ当に屑なやつだったよ」

無視する。なぜこいつらは負けたことを認めない？

本当に屑なのはお前らだ。

頼むからもう二度と喋るな、殺してしまえそうさ。

そんな殺気を必死に抑えている私の耳に聞き捨てならない情報が聞こえてきた。

「そついえば、村長から聞いた話なんだが、あのガキこの村から追い出されるらしいぜ。」

やっと我がエキドナ村が平和になるよな。

だからさ、シャルロスもうあんな屑を心配すること無いさ。

後はアイツを罵倒してやれよ、クツクツク

お前から見とけよシャルロスが今からアイツを絶望のふちに落とすからよ」

「いったれシャルロスちゃん!!」

「あのガキを泣かせてきてくれよシャル」

何……だと？

今あの屑なんて言った？スコールがこの村から追い出される？

ハハッ、冗談にしては面白い、ああ屑がまた口を開く。

愚かなやつだ、そんなに私に殺されたいのか？

殺意をどのようにしてスコールに気取られず噴出するか考えていると屑の口からは決して聞こえてはならない単語が聞こえてきた。

「……ア……リア……サリア！聞いているのかい？」

ブチッ

ああ駄目だ、屑の口からその言葉が出ては駄目だ。

もう許せない、許す気も無い。

せめてスコールにはこんな醜い姿を見せないようにしないと。

横目でスコールのほうを見ると彼は何かを悲しんでいるようだ。

おそらく、この屑のドリスさんへの姿勢を見た所為だろう。

安心しろこいつらに悲しんでもらってもドリスさんは浮かばれない

さ、私ができることを教えてあげるよ。

「サリア聞いている」「黙れ」……は？」

「黙れと言っている二度も言わせるな、それと私をサリアと呼んだことは許してやろう。」

私に感謝しろ3人と父にこのことを言えば生きていないからな。だがしかし、スコールを侮辱したことは許さない。

ここは葬式中の神聖な場であるから何もしないが、これが終わったあとは覚えておけ、

親友を馬鹿にした罪と親友がこの村から追い出されるといふ妄言

を吐いた罪を悔いながら逝け」

「な…なに言っているんだ！なんであんなガキを」

「あたりまえだろ私の唯一無二の親友なのだから

それと黙れと言っている失せろ！」

「…ひいっ」「」

そう悲鳴をあげてようやく屑どもが私の視界から消えてくれた。

あの屑どものことはどうでもいい今はスコールを慰めることが私のすることだ。

私は先ほど見たときから少しも動いていないスコールの後ろに立って彼の名を呼んだ。

「スコール」

スコールは振り向くと私の名前を呼ぶ、家族以外に彼だけが呼べる私の名を。

「サリア？どうしたの？」

「いや、ドリスさんが死んでしまっただ変だったな。

でも、ドリスさんはきつと、そんな世界に絶望したような顔で見送られるよりも

笑顔で見送られるのを望んでいると思うぞ？」

絶対そのほうがいいさスコール私もお前の笑顔と行動で救われたのだから。

だが彼は自分の魅力に気づかないからきつと、自分を卑下するだろうな。

「…そんなこと無いさ、きつと父さんは僕の笑顔より沢山の人たちの笑顔のほうが

父さんは喜ぶよ。」

…やっぱり分かっていない、ここは私がしっかり教えてあげないと親友である私がない。

「それは無いよスコール。私はドリスさんからあなたの話を良く聞かされていたんだぜ。

本当に生まれてきてよかったって、何度も何度もそれこそ耳にた

こが出来るくらい

私に言ってくるんだ。だから…笑ってあげて？

あんな怒っているような顔よりも…な？

私も一緒に笑って見送るからさ」

私はスコールが安心するように自分が出来る精一杯の笑みを浮かべて言うと

ほんの刹那の間戸惑っていたかと思うとすぐに

「…そうだね、ありがとうサリア」

と泣きながら、そして、微笑を浮かべながら言うてくるから私もそのまま泣いてしまい

しばらくの間、二人で泣いていた。

スコール旅立ちの日・エキドナ村・近くの街道

私は葬式が終わった次の日のことをスコールを待ちながら回想していた。

あの葬式のあと屑どもの暴言を父に言った後に父の口から信じられないことを聞いた。

曰く、スコールは本当に村を追放されるのだと。

あり得ないと叫んだ、しかし父ですらスコールを追い出すことには賛成らしい。

もうスコールに会えない、そう悲嘆にくれていると父からスコールは冒険者になって上位ランクを目指していることを聞いた。

父は笑っていたが、私はそのとき決めた。

待っているだけでは会えないなら、こちらから会いに行つてやれば良い。

残念ながら魔法はまだ覚えていないがそんなことは今から覚えていけばよい。



しばらくは父が許してくれないだろうが、すぐに許可してくれるだろう。

なんせ貴族の大半が冒険者ギルドに一応入っているのだから。

しかし私はなぜここまでスコールに固執するのだろうか？

親友だから？いや、違う気がする。

まあいいとりあえずは剣の鍛錬を始めねば、私はスコールの旅立ちの日を父から聞いて

剣の鍛錬をするために外へ出た。

私が回想から回帰するとちょうど目の前にスコールの姿が確認できた。

彼はこちらを視認すると驚いた表情をした。

可愛いやつめ

「サリア！」

「よう、見送り出来なくてすまん。どうしても父が許可してくれなくてな

ちょっと無理やりだがさきにここに来ていたぜ」

「そうなんだ、僕はてつきりサリアに嫌われたかと…」

「そ、そんなわけ無いだろう！」

全く何考えているんだ、私がスコールを嫌う？あり得ないね」

「そ、そうかな？」

「そうだよ君はは全くそういうところがあるのがいけないだからこのm」

「ごめん！許してくれって」

そういつて謝ってくるスコール、フンまあ許してやろう、

私は寛大だからな感謝するといい。心の中でそっぴいなから私はスコールに

本題を話すことにした。

「ム、分かったならいいだろう。」

それよりも本題だ、君は冒険者になるのだろうか？」

「うん、父さんにも言われたしね」

「うむ、それならいい…実はな私も冒険者になろうと思うんだ」

「サリアも？」

「ああ、父がまだ認めてくれないが今日から剣技を鍛えていこうと思っ

「だからもし、万が一にも冒険者になつたら一緒に依頼を受けないか？」

「本当に！分かった約束だな」

「ああ、だからスコールも絶対に冒険者になって私が冒険者になる前に

「やられたりするなよ？」

「分かった。じゃあまた会う日まで！」

「そっちもな！」

「そうだスコール今は別々の道を行こう。」

「君と次に会ったときまでに私かなぜ君に固執するのかその理由を突き止めて

「私と君で上位ランクを目指そうじゃないか。」

「とりあえずはその日まで、さよならスコール。」

01 another ～決意～（後書き）

遅れました理由は…予約投稿をミスったからです。

…すいません！！次回からは直接投稿で行きたいと思います。

では、最後まで読んでくださってありがとうございます。

ご意見感想お待ちしております。

02 〽遭遇〽 (前書き)

GWに用事が入りすぎまして投稿が遅れてしまいました。

このままではマズイ!!

と、思いまして、これからは投稿のペースを

ひとつの話を投稿したら、3〽5日のペースで投稿していきたいと思えます。

すみませんでした。

それでは、02 〽遭遇〽

ごゆっくりお読みください。

## ソレディンキュー付近の街道

村を出て、サリアとの約束から2日後、スコールはエキドナ村からなんの問題も無く、後1日で目的地のソレディンキューに着くところまでできていた。

「ふう、お腹すいたな、すこし休憩しよう。それにしても、ようやく此処までこれたな。」

もう少しソレディンキューだ。そこで冒険者になるのか」

スコールは恐れと歓喜が混ぜ合わせたような口調でそう言うと村から出る前に持ってきた、携帯食料の入っていた袋の中をのぞくと昨日見た光景と何一つ変わっておらず空っぽのままだった。

「…携帯食料を昨日の昼から切らしてたんだっけ、今日のご飯はどうするか…」

流石に2日間も食料なしで歩くと、シエルパー先生がいていたモンスターに遭遇したときに戦えないし…

モンスター出遭わないように注意しながら歩いていけば大丈夫かな?」

スコールは村での生活で1日何も食べないなんていうことはざらにあったので、

1日ぐらいなら食べなくても通常行動は出来るではあるが、先に言ったとおりシエルパー先生からこの場所では最近モンスターが現れているという情報を得たのと、

もう2日間から何も食べていないので、流石のスコールも少しだけでも食べておく必要があると判断した。

しかし実際に食料がないので、

(件のモンスターに出遭わないように神に祈るか)

と思索していると向こうに影が見えた。

「ん…あれは？…人影だ！」

丁度良かった、あの人から携帯食料をすこしだけ分けてもらおう」  
偶然見つけた人影の方向に向かってスコールは出来るだけ速く歩き始めた。

数分後・ある商人の馬車

「すいませーん」

先程の人影が見えた場所に行くとその影が商人であることが馬車についている商業ギルドのマークから分かった。

（商人か…お金足りるよね？）

スコールの所持金はシエルパー先生からもらった2ペル30ギルある。

…コレだけの金があれば通常の価格なら十分に携帯食料が10日分は帰るくらいの量である。

…ちなみにこの世界の貨幣制度は、価値の高いものからシリル、ペル、ギル、リルである。

そして、ギルからリルへの両替は世界共通でリル1000枚になりそのほかシリルからペル、ペルからギルは100枚の価値がある  
…すなわちスコールは現在はずこし大目の金は持っているのではあるが、商人との交渉術は村にいたときに

村に行商に来ていた友人である商人にすこし教えてもらっただけであるので心配だった。

…しかし、スコールの心配は杞憂だった。

なぜなら、

「なんだ？何か入用か、…だが残念だったなこれは全部エキドナ村に売りに行く商品なんだ。」

「他を当たってくれ」

馬車から出てきたのは褐色の肌で体が丁度良く引き締まっている美男子といわれる類の青年だ。

スコールは商人の声に心当たりが合った。

「エキドナ村って…まさかシートン？」

「?…なんで俺のこと…ってああ！スコールじゃねえか！」

この青年こそが、彼に交渉術をすこしだけ教えた、スコールが村にいたときの友達の一人である、

シートン＝ボナパルタである。

彼は商業ギルドのギルド員で1ヶ月に一回の間隔でエキドナ村に行商に来て

村に来る他の商人よりは良心的な値段で商売をしていたので村からは優遇されていたのだが、

あるとき仕入れミスをしてしまい信用を失いかけたとき、唯一味方として彼を弁護したのが、スコールである。

…影から、彼をそのときから気にかけていたサリアも動いていたが…

なんとか村の民の信頼を取り戻したシートンはその日から今までは避けていた、

ランスロット家と親交を持つようになった。

勿論、シートンとスコール、個人での付き合いはとも仲良くなり、時々スコールはシートンに商人の心得を聞かされたりしていた。

そしていま…

「やっぱりシートンだ懐かしいな！3ヶ月ぶりくらいかな？」

「ああ！…あれ？そもそもなんでこんなところにお前がいるんだ？オヤジさんはどうした？」

「…父さんはもう…死んだよ」

「え……そうか、あの人…すまなかつたスコール、知らなかつたとはいえ」

「ううん…大丈夫だよ、父さんはきつと見守ってくれるはずさ」

「…スコール、…そうだな、きつと見ていてくれるはずさ」

「有難う、シートン」

しみりとした空気が場を支配しかけたが、シートンがその空気を振り払うように話題を変えた。

「そういえば…なんでスコールがこんな場所にいるんだ？」

もう少してソレディンキューに着いちまうぞ」

「いいんだよ、僕は冒険者になる為にその町を目指しているんだ」  
ぴくり、とシートンの眉が上がったことに気づかず、スコールは言葉を紡いでゆく。

「父さんの最期の言葉だし、なにより村を追い出されちゃったから」  
「ら」

「どういう事だ!!」

突然シートンが声を荒げてスコールに向かった

「シートン?ど、どうしたの?」

「どうしたの?...じゃねえ!

村を追い出されたってどういうことだって聞いているんだよ!  
サリアはこのことを知ってるのか?」

「う、うん」

首を縦に振ると、シートンは独り言を呟き始めた。

「サリア…ことだ?...…なったら…商…薦めるか」

「シートン?」

「スコール!」

「うわっ!」

びつくりした、急に振り向かないでよ、どうしたの?」

「スコールに冒険者なんて危なすぎる!...そこで相談なんだが、スコールさ商人になってみないか?」

「商人?僕が?」

無理だよ、僕にはそんな能力なんてないからさ、すぐに騙し取られておしまいだよ」

「いや、お前は呑み込みが早いからすぐに俺と同じぐらいの大商人になれるさ!!」



スコールはすこし言うのを躊躇っていたが、すぐに口を開き

「…それでも、僕は冒険者になるんだ…サリアと約束したし、  
なにより僕自身がやってみたいんだ」

「だけど！」

「シートン、心配してくれて有難う。」

そういつてスコールは感謝の気持ちで精一杯込めて笑った。

父が死んだとき、泣きながらも笑ったあの時と同じような笑みを

「っ！…はあ、わかった、もう何も言わん、しかし、冒険者を目  
指すからには約束しろ、

俺ももうすぐ必ず大商人になるからその時は、スコール、お前  
も高ランク冒険者になって

俺のお得意…いや専属になりやがれ！

コレだけは約束しろ！…良いな！」

シートンはそういつてスコールの返事を待った。

スコールは最初は驚いていたが、すぐに

「ああ」

強く頷いた。

「それならいい、

しかしスコール気をつける最近このあたりでモンスターが出る  
らしい。

村人が集団で集まったら撃退できるレベルらしいが、それでも  
モンスターだ、攻撃を受けたら結構なダメージをくらうぞ。

武器があればスコールにあげたんだが、武器の納品が今回はな  
かったから、今は渡せん

すまん」

「いいんだ…けど」

「けど…？どうした？」

「…食料がほしい」

そのとき

く~~~~

あたりに可愛らしい音が響いた。

「あう」

「つぶはははははははっ」

「笑わなくても、言いじゃんか」

「ごめん、ごめん」

「それにそんなに顔を赤らめるほど笑ってさ」

「っ！それはお前の顔が反則級に…」

「なんて？」

「なんでもない！…そんなことより今日は友の祝いの日だ！

存分に食料を振舞おう！」

「良いの？」

「かまわない！こんなときは盛大に祝おうじゃないか！！」

宴会の音は深夜まで続いた…

翌日

「なあ、スコールもう一度だけ言うが商人になる気は…」

「ごめん…」

「いいさ、じゃあ何も言わないさ…」

また会おう」

「立派な商人になれよ」

「おおとも！」

シートンと別れてスコールはソレディンキューの町をひたすら歩いて、

半分程に差し掛かったときのことだった。

ガサガサッ

草むらから噂されていた、モンスターが出てきたのは…

ようやく、次回は初戦闘シーン突入です。

上手くかけるかは分かりませんが、楽しみにしてくれと幸いです。  
では、最後までお読みくださって、ありがとうございました。  
ご意見、ご感想をお待ちしております。

### 03 〽戦闘〽(前書き)

お待たせしました。

03 〽戦闘〽です

初めての戦闘描写ですが、異様に苦戦しました。

おかしな点もあると思いますが、〽〽容赦ください。  
それでは、〽〽ゆっくりどうぞ。

## ソレディンキュー丘・近辺の道

スコールの目の前に突然現れたのは、体調が80～90センチほどで全身を毛で覆われた、

犬のような耳をしているモンスターだった。

モンスターは手に木の槌を持っている。

槌の形状は長さは普通の戦争で使われるオーソドックスな剣の長さと同じくらいで

重さは普通に斧くらいの重さらしい。

モンスターの名称だが、名前が冒険者でもないスコールにはは分からないので

スコールは便宜上、モンスターと呼ぶことにした。

モンスターはどうかやら武器も持っていない、スコールを完璧に狩るべき得物と認めたようだ。先程からこつちを見ている。

後ろを見せたらどうなるかは分からないが、この状況で進んで背中を見せようとは思わない。

しかし、スコールが唯一使える戦闘力になるのは両の腕と、昨日シートンにもらった、

錆びついていて、刃こぼれもしている短剣1本のみだ。

シートンが納品する品物の中から使えそうなものを何とか選んでくれた結果だ。

感謝こそすれ、恨んだりすることはない。

それに

（例え逃げれたとしても、武器がないからなんて理由で

モンスターから逃げている奴に高ランク冒険者なんてなれるはずがない！！）

スコールはモンスターとこの武器だけで戦うことを決めた。

：スコールは生きるためにはどのようなものでも利用するタイプの人間で

強大な敵でも、格下の敵でも常に全力で行け！と父に教えられた。事実ドリスはどのような敵でも全力で当たるようになった。

強大な敵ならば策を練って倒してきた。

格下の敵ならば全力で油断をせず常に奇襲などに気をつけて戦ってきた

そのおかげでエキドナ村で生活していくことができたのである。

父ならばこの武器で倒すことは不可能でもその知恵と戦術で撃破もしくは撃退することは出来るだろう。

(父さんに出来るならば、僕も出来るはず！)

「さあ、来い！モンスター冒険者志望のスコールがお前を倒す！」  
そうして構えるスコール。

モンスターは何故かコチラに攻め込まずに様子を伺っているだけだった。

(どういうことだ？)

確かに今のタイミングは絶好の機会のはずだったのに、何故攻撃してこない？

と、思っていたが、意識をモンスターに寄せた途端にモンスターも槌を構えて

こちらに向けて駆け出してきた。

走ってくるスピードは一般人からするとすこし速い、といったレベルだ。

(速度検証、終了)

そしてスコールがその場所で立ったまましているとモンスターが槌を振り上げた。

「なっ！速い！？」

スコールは予想外に隙のない、その動きに驚きながら思い切り横に飛んだ。

モンスターの槌が地面に激突した瞬間

ゴツッ

という音と共に当たった箇所は地面だけが弾け飛んだ。

どうやらモンスターの攻撃は一点集中型らしい、成る程当たったらダメージで良くて行動不能、最悪、即死だろう。

(攻撃状況、及び攻撃スピード、検証終了)

モンスターの槌を元の位置に戻す速さは大体1秒ほど掛かった。

(速効性、検証終了)

…あとは防御能力だけ！攻撃するチャンスは近接技しかない僕にはモンスターが槌を振り上げているときのみ、

しかし、あいつに近づくとおそらく槌を横に振られてしまう。どうする？)

そのように思っている間にモンスターがもう一度向かってきた。

先程と同じ動きを繰り返す、スコールはそのとき有る場所にモンスターの致命的な弱点を発見した。

(弱点考査、検証終了、モンスターのあの場所から、ある仮定を推測立証に動くべきだと判断する。しかし、念のためあと少しばかり観察を続ける)

その後、3度ほどモンスターが変則的なスピードで走ってきたり、振り下ろすタイミングをわざと遅くしたりしてきたが、

やはりある一点においてだけ動きが同じであることがスコールは分かった。

それが畏なのか、どうかはもう検討がついていた。

ポイントは彼の体躯が一般人よりも小さくて、かつそれでいて腕の筋力の盛り上がり具合のみ

一般人では遥かに届かない域に達していたことがミソである。

他の部位の筋肉は一般人よりすこしだけ上達した筋力しかないことが分かった。

そのため、モンスターが走るときは一般人より少しだけはやかっただけ、

攻撃の槌の振り上げに時のみ想像以上に早かったのである。

しかしそれならば何故、槌を戻すときはあれほど遅かったのだろうか？

その理由は簡単である、それは

「モンスターは、腕とその他の筋力とのバランスがとれていない！  
その為に槌を振り下ろした後に若干のタイムラグが出来た！

それならば、お前の攻撃方法も限定される！！

すなわちお前の攻撃方法は常に縦振りしかない！

なぜなら、横に振ってしまったら、足で踏ん張ることが出来ずバ  
ランスが崩れてしまい

自分自身で自滅してしまう！！…それがお前の致命的な弱点だ！！」  
スコールの言葉が通じなかったのか、もしくは、通じた上で無視し  
たのかは定かではないが、

再度モンスターが突撃してきた。

振り上げのスピードを意図的に遅くしてスコールの際を作ろうとし  
たのだが、

当然スコールはそんなものにひっかからない、やがてモンスターの  
腕に筋肉が盛り上がるのを見ると

最小限の動きで攻撃をよけて…一点集中型の攻撃なので直撃さえし  
なければ、なにもこわくない。

地面に衝突した瞬間、驚異的な防御力がある腕以外の…例えば下半  
身を攻撃すれば

「これで…どうだー！！」

モンスターの太ももに短剣を突き刺すと、

「ぎゃー！！！！！！！！」

…というおぞましい声と共にモンスターがのた打ち回った。

「無理もない今回は短剣を力任せにたださしたからね、常人をすこ  
し越えるような筋力しかないから

かなり痛いと思うよ…まだ、やるか？

僕は何度でも君の筋力のないところを短剣その他で攻撃するよ」  
それはハッターだった。…スコールには武器がもう存在しないので、



このまま戦い続ければ負けるのはスコールである可能性が高い。  
暫しのにらみ合いの後

モンスターは今度こそ通じたのか短剣を右太ももに突き刺さったまま、槌をふりあげ警戒しながら去って行った。

「ふう、勝った！勝ったぞ！」

なんとか初勝利を飾ったスコールはそれは楽しそうに今の出来事反復した。

「おっと、喜んでばかりいられない、はやくソレディンキューを指そう。」

僕は驕ってはいけない、それが数少ない父さんの教えだから」

なんとかモンスターを撃退することが出来たスコールは戦いで疲れた体を引きずりながらも

意気揚々とソレディンキューの道を進んでいった。

### 03 〽戦闘〽(後書き)

次回はようやくやくギルドのある町に着く予定ですが、まだ冒険者にはなりません。

説明などもあるので、おそらく後2〜4話ほどかかる予定です。

最後までお付き合いありがとうございました。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

04      〽約束〽 (前書き)

おまたせしました。

04    〽約束〽です。

今回は新キャラを二人出しました。

また、一人称視点もありますのでご容赦ください。  
それでは、ごゆっくりどうぞ。

## ソレディンキユー・関所前

この町の名前はソレディンキユー。

町の規模はいたって普通ではある、しかし他の町と違うことは、町という単位に鍛冶、冒険者、商業ギルドがすべて揃っていることである。

このようなところは他には、各国の首都もしくは人口が1000万人を越す都市のほんの一部ぐらいしかない。

何故この場所で3大ギルドが揃っているのか？

その理由は、特殊な地理条件にある、近年までは四方向全てが荒野で本場に町の中継点としてしか機能できなかったが、

とある国から追放された、学者がこの近辺をふとした拍子に調査したところ、

かなり希少な鉱物がとれ、かつ希少種の薬草などが存在していることが発見されて、

その発見を受けて王国が、道を整備したので商業に良く、鍛冶にもするのにも最適であることから

元からあった冒険者ギルドに加えて3大ギルドが揃うことになった、冒険者ギルドは基本どのような国にも設置されている機関で

冒険者ギルドが設置されていないところは、よほど小さな村か、

戦争が絶えず起きて冒険者ですら近寄りがたいという条件がある、小さな国しかない。

…ちなみにエキドナ村は前者に当てはまっていた。

そして、この場所に新たに冒険者になろうと、夕日を背にして勢い込んでいる少年の姿があった。

「やっと着いたー！ー！」

少年は今自分がこのソレディンキユーに着いているという事が奇跡

のように感じている。

なんせこの少年、つい数時間前までモンスターとほぼ素手同然で戦って

なんとか、モンスター相手に乏しい装備で必死で逃げようとする衝動を抑えながら懸命に戦い、

あの時背中を向けていたら、どうなったか分からないが、

これを見事に撃退することに成功できた。

そして緊張と戦争の疲れで重たい体を引きずりながら、やっこの思いでソレディンキューの門の前について今に至る。

「あー疲れた、とりあえずご飯とかよりもゆっくりと休みたいな」  
憔悴しきった顔でスコールはそう呟き、睡眠の欲求に耐えながらも、関所の入り口まで歩いていった。

ソレディンキュー・関所

「よし、通行を許可する。次のもの！ 前へ」

(…やつと僕の順番か)

あれから関所の前についてみると、かなり、とはいかないまでも結構な人が並んでいて

加えてこのソレディンキューは先にも述べた通り三大ギルドが揃っているのです

悪いことを考えるやつが後を絶たない。

そのため、警備は否応なしに厳重になり、その結果スコールが検閲を受けるのに実に1時間も待たされたのだった…

その間にスコールは、眠気のほかに空腹も襲ってきて大変な状態だが(これを乗り切れば…)

と自分を励まして、検閲に望んだ。

「まず、荷物検査を…っと

荷物はその腰から下げている袋のみか…一応中身をみせてくれ」

検閲をしているのは外見こそ冴えないオヤジ顔ではあるが、行動の節々に現れる厳肅な力が素人でもはつきりと分かる。

(この人の前で嘘をつくなんて……あり得ない!!)

もし下手な嘘をつく……等と悪い想像をしている間に荷物の検査は終わっただらう。

検査官に荷物 旅の袋のみ を返してもらおうと、

「この町で何をやる予定なんだ？」

冒険者や商人になるのか？」

「はい！この町には、冒険者になろうと思って来ました！」

町にきた目的を聞かれたので、正直に自分が冒険者になりたい旨を告げた。

「……分かった、しかし、冒険者は誰にでも脚光が浴びれる夢の職業ではない

……それどころか、何の成果も出せないほうが、圧倒的に多いんだぞ、……それでもまだやるのかい？」

男は、どこか探るような目線でスコールの瞳をじっと見ていた。

その視線に微塵もひるまずに、スコールは

「……無論、承知しています。」

しかし、僕には父や親友との約束がありますから……

だから！だから僕は絶対に高ランクの冒険者になって見せます！強い意志をともした瞳で男を見据えた。

「……そうか……その心意気は認めてやる。」

少なくとも冒険者になる資格はあるようだ。

……いいだろう、お前がこの先偉大な冒険者になれるように祈っている。

通行を許可する！」

そういつて男は次の相手の検閲に移っていった。

「……ありがとうございます！」

スコールは男に礼をしてから、その場をさって、宿屋を目指し始めた。

数時間後

検閲官SIDE

「ふう…」

やっと終わったか、目の前で閉じられていく門を見ながら今日の仕事の終わりを実感する。

そうやって今日の一日のことを振り返っていると、後ろから足音が聞こえた。

振りかえらずとも、その足音が誰なのかは分かった。

「お疲れ様じゃな、ストックリーヴル」

「いえ、ギルド長こそ聞きましたよ、今日の会議、大変だったらしいじゃないですか」

「ほっほっほ、なーに、まだまだ若いもんには負けんよ、ワシは」  
「ならいいんですがね」

この一見するとただの老人にしか見えない、このじいさんこそソレデインキューの冒険者ギルドの長の  
ガノフリーライズその人だ。

…ちなみに俺の名前はストックリーヴルこれでもしがない冒険者だ。

「しがない、とはのう。」

世の冒険者が聞いたら泣くぞ、SSランク冒険者なのに」

「…さらっと人の心を読まないでください」

「ふむ、まあ癖じゃからのう」

「…はあ」

「そうじゃ、今日の報告を聞こうか」

「分かりました。今日の冒険者希望者は約40人でした。」

「相変わらず一獲千金を狙っておるようじゃな」

そういつてガノフは重苦しいため息を吐いた。

「…で、お主が有望と見るものはいたかの？」

長は俺にそう聞いてくる、取りあえず今日来た中で有望そうなやつをあげていくが…

「俺の目には留まらなかったですね…まあこれから期待ですよ。

どう変化するのは、誰にも分かりませんから」

「そう…か、今日も即戦力はなしか」

言葉とは裏腹にそれほど落ち込んでいない長であるが、

ふと、脳裏に浮かんだのは最後の少年、

あの瞳に宿った意志を今後も保ち続けられるならばあるいわ…

…とそこまで考えて止めた。なぜなら

「では、そろそろ時間じゃ、ストック」

「分かりました」

これからは観察者ではなく冒険者の時間に切り替えるからである。

いま考えていたことを頭の隅に追いやり、俺はギルドへの道を長と  
いっしょに歩いていった。



ようやく次回で冒険者登録…かと思いきや、恐らくギルドのランク説明などの

説明回になると思います。

もしかしたら退屈になるかもしれませんが努力しますので、待っていてください。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5730s/>

---

ある冒険者の物語

2011年5月18日08時40分発行